

第10回地域力パワーアップ大会 ～多世代交流で育む地域力～

日時 令和8年2月8日（日）10時00分～12時30分

場所 松山市総合コミュニティセンター 企画展示ホール1階

出席者

松山市副市長	田淵 雄一郎
松山市坂の上の雲まちづくり部副部長	八塚 健
松山市坂の上の雲まちづくり部まちづくり推進課長	井上 圭二
松山市コミュニティ・アドバイザー	若松 進一
〃	前田 眞
〃	笠松 浩樹

参加者 約150名

次第

- ・開会アトラクション
- ・開会あいさつ
- ・絵本で育むまちづくり
～多世代交流のための絵本の活用方法～
- ・新玉地区まちづくり協議会取り組み事例発表
- ・まちづくり人財育成アカデミー活動報告
- ・地域と愛媛大学との連携事業について
- ・松山市コミュニティ・アドバイザーからの講評

内容

1. 開会アトラクション



伊豫の国新玉古照水軍太鼓



松山市立城西中学校吹奏楽部

2. 主催者あいさつ

松山市 副市長 田淵 雄一郎



3. 松山市コミュニティ・アドバイザー紹介

若松 進一 ・ 前田 眞 ・ 笠松 浩樹

4. 絵本で育むまちづくり～多世代交流のための絵本の活用法～

講師：聖カタリナ大学短期大学部保育学科 教授 遠藤 文子

オペレッタ：聖カタリナ大学短期大学部「劇団 保育座」



オペレッタ『なんじゃもんじゃのいのち』



『いのち』を考える授業

【オペレッタ（音楽劇）について】

- ・『なんじゃもんじゃのいのち』（脚本・作詞：山本省三 作・編曲：越部信義 振付：藤田良子株式会社メイト）は、突然の嵐で倒れたなんじゃもんじゃの木を、森の動物たちが力を合わせて助ける話。
- ・劇団 保育座は、保育学科1・2年生の有志で結成された劇団。「いのちを守る大切さ」を子どもたちに伝えるために、みんなでアイデアを出し合い表現した。

【多世代交流のための絵本の活用方法について】

- ・絵本をつかって地域でつながろう！
絵本を通し、様々な「いのち」について、地域の方と一緒に考えることができるよう、授業形式で話をしていきたい。（舞台上に小・中・大学生・地域の方等8名が参加）
- ・「いのち」についてイメージマップで書いてみよう。
「いのち」と聞いてイメージするものは（舞台だけでなく、会場の方も参加してもらう）
→ ハート・誕生・つながり・尊い・協力・1人に1つ・大切な物・死など。
- ・多世代交流には、共通の話題が必要となる。「いのち」が大切だということは、小さい

子どもから大人まで皆知っている。でも、「死」はここにいる人は誰も経験したことがない。

- ・絵本を通して「いのち」を考えよう！

今回舞台に上がっている8名の参加者に事前に「いのち」をテーマにした絵本を選んできてもらった。その絵本と選んだ理由について発表してもらおう。

→選んだ本と理由（抜粋）

『保護ねこものがたり』猫の命の誕生やつながりが描かれているから。

『ずーっとずっとだいすきだよ』死について書かれてあり、言葉で伝え続けることで、後悔なく死を迎えられる場面に気持ちが打たれたから。

『もうじきたべられるぼく』もうすぐ食べられる牛の覚悟と、親との絆が描かれていて、感動したから。

『わすれられないおくりもの』生きるための知恵や人との関わり、命は無くなってしまいが、何か残せるものがあれば良いと思ったから。

『ほしのこども』親しい人の死で、寂しい思いをしたが、人は同じように生まれ、亡くなっていくことを納得することができたから。

- ・皆が選んだ絵本を、地域の中でつなげていくための具体的な方法として、今回発表してもらったような自分が選んだ絵本の紹介（本の名前、あらすじ、選んだ理由）を小さい画用紙に書き、それを大きな画用紙に貼り、共通のメッセージを一緒に探し、考えていく。今回なら、発表の中で多くの人が語った「死」について、大人から子どもまでと一緒に考えて話をするすることで、つながりを感じることができる。
- ・「死」を扱った『わすれられないおくりもの』は小学3年生の教科書にも掲載しているが、子どもは子どもなりに、大人は大人なりに、色んな感じ方がある。小さい頃に読んだことのある絵本を、大人になって読みたくなったら、本屋さんや図書館で手に取ることができるもの絵本の魅力。
- ・『もうじきたべられるぼく』の読み聞かせをしていた大学生が泣いていたが、その後の食堂で、感謝してお肉を食べていた。人は、生き物の命をいただいていることを時々忘れてしまうことがある。子ども達が自分達にできることを考えるきっかけにもなる。
- ・絵本を通して「いのち」を一緒に考えることで、死の悲しみや怖さではなく、自分も頑張ろうという元気をもらえる。多世代交流は、身近な絵本をきっかけにできると思う。地域で集まることがあれば、1冊ずつ絵本を持ち寄って、ちょっと話をする地域交流からつながりが生まれることもあると思う。

5. まちづくり協議会取り組み事例発表

新玉地区まちづくり協議会

“10年の歩み”

新玉地区まちづくり協議会

会長 上岡 征司 ・ 事務局長 泉 一郎



【新玉地区の紹介】

- ・人口は約1万3千人、世帯数は約6千9百世帯。JR松山駅を中心に住宅・文化遺産・商業施設などがある。主要施設は総合コミュニティセンター、総合公園、大宝寺など。

【まち協の活動】

- ・新玉まち協は、平成27年に設立し、住民自治の強化、官民協働の促進に向け取り組んでいる。令和2年に2代目である現会長が就任し、公民館長と兼務している。まち協の人員不足が予測されていたため、公民館や各団体と共同で取り組みを行っている。
- ・スローガン「笑顔あふれる新玉をめざして」の実現に向け、基本理念を掲げている。

○安心安全なまちづくり

地区の防災福祉マップを作成し、病院・銀行・AEDの場所なども記載し、全戸配布済み。計画的に防災用品の購入も行い、防災倉庫と小学校に保管している。

また、児童登下校時の防犯パトロールや小学校での防災授業を実施している。

○人にやさしいまちづくり

高齢者を対象にまつイチ体操を行っており、累計1,300回以上実施。子どもスポーツ大会は、天気も考慮し、屋内で実施している。人権啓発活動を推進しており、令和7年は認知症サポーター養成講座を実施した。

○環境に良いまちづくり

JR松山駅周辺や歩道橋などの清掃活動を行っている。地域住民から回収したペットボトルキャップを小学校へ寄贈。

○元気あふれるまちづくり

広報誌「きんもくせい」を発行している（現在20号発刊）。地区の夏祭り「トワイライト新玉」は、1,500～2,000人が来場する盛大な祭り。新玉音頭を踊ってもらうために、DVDを作成し、児童への教習時に使用してもらっている。

○学び合うまちづくり

しめ縄づくり、文化体験学習などを実施。地区の歴史文化を綴った「遊ゆうあらたま」を昨年度作成し、二十歳の集いで配布した。将来、新玉に戻って来てほしい願いも込めている。歴史文化まち歩きで大宝寺を訪れ、歴史を学んでいただいた。

【今後について】

- ・10年が経過し、地域全体でよりよい新玉にしたいと考え、令和7年に住民へアンケートを実施した。692件依頼して、391件の回答をいただいた。回答から、防災（訓練の実施、防災マップの作成・周知）や道路の安全（防犯カメラやカーブミラーの設置）、子どもの健全育成（子どもが参加できるイベント開催、コミュニティスクールの活動促進）が住民に求められていることが分かった。
- ・10年間で一定の基盤づくりができた。「まちづくりの目標は人づくり」とあるように、人材の育成に注力する必要がある。アンケートにより、今後取り組むべき課題を顕在化できたため、今後も「笑顔あふれる新玉をめざして」を念頭に活動していく。

6. まちづくり人財育成アカデミー活動報告

地域の担い手の不足や若い世代の無関心という課題に、少しでもお応えできるよう、人財育成アカデミーを立ち上げた。市内10地区から13名が月1回の活動で、まちづくりの基礎やグループワーク、イベントスタッフなどを体験してきた。メンバーは、既に活躍中の方、これからという若い年代の方など様々で、お互い刺激し合い、多くの気付きもあった。3グループの活動を報告する。

【Aグループ】

テーマ：地域のまちづくり組織の若返り

現在、地域行事の運営側や参加者も高齢化しており、若い方の参加も減っている。地域行事が無くなると、住民の世代間交流が無くなり、まちづくりが衰退していく。地域の伝統を絶やさないためにも若い世代に繋いでいくことが大切。若い世代に参加

してもらうには、子ども達や親子が楽しめるイベントの開催により、三世代交流につながる。行事に参加することで、徐々に運営に関われる機会を生み出したい。

南窪田の防災訓練で実践・検証を行った。この訓練では、子ども達が太鼓の演奏や炊き出しの調理をメインで行った。子ども達が楽しく参加できる内容にすることで、相乗効果を生み、親子の参加者が増えていくことにつながると感じた。子ども達にやりたいことを聞いて、イベントを企画することで、高い効果を得られると思う。

検証結果は、組織の若返りのためには、子ども達が楽しく参加できるイベントを企画することで、親子の参加者が増え、三世代の交流ができ、将来の担い手の確保につなげたい。この好循環をつくることが組織の若返りに最も大切なことだと考える。



【Bグループ】

テーマ：世代間交流の活性化

昔の食文化や暮らしが失われていくこと、地域のつながりが少なくなっていくことが、少し寂しくないか？地域の食を通じて、世代間交流が生まれる企画と運営を提供する。提案したい内容は、“一緒に作って、一緒に

食べて、発信して、記録に残す”企画。小中学生・高校生や大学生と高齢者との世代間交流が可能。具体的には、①小学生が高齢者にインタビューする ②高齢者が教えながら一緒に料理を作る ③一緒に食べる ④小学生が手作り新聞にまとめる(まち協のSNSや広報で発信する)。この取り組みに関して、料理や会場の選定、小学生・大学生の募集、当日の運営などを人財育成アカデミーメンバーがサポートする。

来年度、食を通じて世代間交流に取り組みたいまち協を募集している。



【Cグループ】

テーマ：情報の受発信・共有の仕組み

地域に人を呼び込むには、情報発信が重要。

SNSやチラシ作りの講義を受けた。写真撮影時の構図は、三分割法（画面を三分割し、その交点に主役を置く）と余白を作る（詰め込み過ぎない）ことが重要。撮影のポイント

は、室内でも窓に近い場所で撮影し、手ブレしないように脇を締める。チラシの色味は3色以内におさえると良い。動画撮影の基本は、SNS用なら縦長9：16の比率で撮影し、1カット3～5秒を目安に小まめにカットを変える。SNSに投稿するときのポイントは、#（ハッシュタグ）を付けることで、より多くの人に見てもらえる。

実践例として、写真を観光スポットのチラシ風に編集したり、既存のチラシの色味変更や写真を追加した。高縄山麓市場の広報では、若い方にPRできるよう映えを意識した内容に作り直し、#を活用しSNSに投稿した。配布や設置するチラシに二次元コードを追加するなどの工夫もあり、「いいね」の数が2倍以上になった。



松山市コミュニティ・アドバイザー 前田 眞

3つのテーマは、まち協にとって共感性の高いもの。自分たちが抱えている課題の中から、優先順位を付けて進めてきた。地域のあるべき姿に近づけるためには、何が必要かを考え、皆で知恵を出し合って共創してきた。本日の学びの成果発表だけで終わるのではなく、まち協で取り入れてもらい、メンバーに相談していただくアドバイスできると思う。自分でできること、できないことを含めて、周りの人に協力を求めて頼んでいく受援力も身に付けていただき、まち協の活動を行ってほしい。



7. 地域と愛媛大学との連携事業について

今年度、新たに取り組んだ事業で、学生とのマッチングを進め、6人の学生が7つのまち協と連携し、8つの事業を行った。

多くのまち協から要望のあった祭り・イベントでの出店は、学生自身が収穫した果物を使い、レモネードと桃のスムージーを手作りし、夏祭りなどで出店した。

生石地区の垣生山の道標作製では、学生が実際に登山し、地域の方々にも話を聞き、山で聞こえる音や風景をデザインした。現在、道標プレートの製作に向け準備を進めており、完成次第、随時設置を進めていく。

グルメマップ作りは、素鷲地区の拓南通りの店舗を学生が巡り、学生視点でマップを作成した。完成したマップは、まち協事務所や各店舗に設置し、店舗の紹介に一役かっている。

イベントの企画・運営では、大学生のアイデアで、地元中学生ボランティアを募集し、7名の中学生と一緒に子ども食堂を初開催した。当日は、100人程の来場があり、食事だけでなく、ステージイベントやスタンプラリー、ゲームブースを地域の方と協力して運営してくれた。

若い方の視点を取り入れることで、新たなアイデアや活動に繋がっていく。地域の子供達と連携を図ることで、将来のまちづくりの人材になっていく可能性を感じた。

【活動を行った愛媛大学生】

3つの活動理念 ①地域の食材を地域に還元 ②野菜・果物のフードロスを削減 ③おいしいで人を幸せにするを掲げて活動している。この活動で、「地元の農家から規格外品を買い取ることで、付加価値が生まれる」「私が加工・販売することで、貴重な経験となっている」

「若者の出店で地域が活気付く」という幸せの循環につながっている。

今後も市内のマルシェに出店を拡大し、地域や農家のためにも活動を行っていきたい。



松山市コミュニティ・アドバイザー 笠松 浩樹

インターンシップや実習科目として、松山市と連携し今年度初めて取り組んだ。学生が持っている力を存分に発揮し、地域に残る活動になればと考えている。学生なので、活動期間が1～2年、最長でも4年間なので、継続性が今後の課題だと感じている。来年度以降も、色々できることを考えていきたい。



8. 松山市コミュニティ・アドバイザーからの講評

松山市コミュニティ・アドバイザー 若松 進一

私は、準松山市民で、年間300日位は松山に来ているが、松山市のまちづくりにほとんど参加していない。そういった準市民が多いため、関係人口として活かしていけば良いと思う。

皆さんをゴミに例えて悪いが、ゴミには不燃物・可燃物・類燃物・自然物があり、市民に例えたとすれば、何と不燃人が多いことか。50万人の人口として、38万人の言ってもやらない人がいるということ。人口減少社会だが、もしこういう人たちをワンランクアップすることができれば、松山市は発展するのではないかと考えている。

新玉まち協の発表でもあったように、10年間の素晴らしい実績ができ、これからの10年も新たな歴史を積み重ねると思う。私達も松山市民のために、準市民として努力したいと思う。頑張ってください。



・新玉地区まちづくり協議会10周年記念イベント、その他

